

# 青春漫画～僕らの恋愛シナリオ～

2006(平成18)年6月20日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・脚本＝イ・ハン／出演＝クォン・サンウ／キム・ハヌル／イ・サンウ／チャン・ミイ  
ネ／パク・チビン／チョン・ミナ／チョン・ギユス (エスピーオー配給／2006年韓国映画／  
111分)

……お馴染みの(?)韓国版純愛ドラマだが、幼なじみの男女間の友情が、ある「突発事故」の後、恋心へと変容していくサマ(?)がポイント……?前半のコメディタッチはタイトルどおりの「青春漫画」だが、後半からクライマックスに向けて、涙の抱擁シーンとなるか否かに注目。ところで、女優を目指すキム・ハヌルはいい味を出しているが、ジャッキー・チェンに憧れるクォン・サンウのオカッパ頭はどうも……?

## ブルース・リーからジャッキー・チェンへ……

1978年の朴正熙の軍事政権下という時代状況の中、クォン・サンウ扮する主人公が、ブルース・リーに憧れながら、ケンカと恋愛に多感な青春時代を過ごす姿を描いた映画が『マルチュク青春通り』(04年)だった(『シネマルーム8』35頁参照)。しかし今回は、時代を現代に移すとともに、クォン・サンウ扮する主人公イ・ジファンが憧れる対象も、ブルース・リーからジャッキー・チェンにサマ変わり……。

また、『マルチュク青春通り』では、自由が抑圧され、不満が鬱積した高校生役だったが、今回のジファンは既に大学生。そして今は、何でも自由な雰囲気の中で生活しており、自由に夢を抱き、それに向かって邁進することができるいい時代状況。そんなジファンの夢は、世界的アクションスターとなって映画に出演すること。もっとも、ジャッキー・チェンと同じようなオカッパ頭をした彼が今やっているのは、つまらないスタントのアルバイトだけ。しかし、「俺だってい

つか……」という夢だけは超一人前……。

## ダルレの夢は……？

こんなジファンの小学校2年生からの幼なじみが、同じ大学に通っているチン・ダルレ（キム・ハヌル）。ダルレの夢は女優になることだが、何と人前に立つと心臓がドキドキしてしまうという舞台恐怖症だということから恐れ入る……。そんなことではいくらオーディションを受けても落選の連続となるのは当然だから、まずはその克服が大前提。そこで彼女は、毎日鏡に向かってセリフの練習をしているが、ある時思いきって、バスの中で乗客に向かって大声でセリフの練習を試みたり……。そんな努力の甲斐あって、彼女の女優としての途は開かれていくのだろうか……？

ちなみに、ダルレは一風変わったジファンの父親のイ・チャンホ（チョン・ギョス）にもかわいがられており、今、自称小説家のチャンホは、いつかジファンとダルレの恋を实らせたいと思っている様子……。

## 2人の出会いは……？

2人の出会いは、ケンカっ早く乱暴なためクラスメートから仲間外れにされていたジファン少年（パク・チビン）に対して、やさしい女の子ダルレ（チョン・ミナ）が声をかけたことから始まった。『小さな恋のメロディ』（71年）風に（？）、2人の仲は順調に進み、今は同じ大学に通っている。しかし、大人になると男と女のつき合い方は難しいもの……？

何でも素直に話ができる相手であることは変わらないものの、今は会えば口ゲンカのくり返し……。

そんな中、今ダルレには、ムン・ヨンフン（イ・サンウ）という彼氏が。彼はジファンのテコンドー部の親友で、背が高くカッコいい青年。他方、ヨンフンとダルレの紹介で、ジファンにもキム・ジミン（チャン・ミイネ）という背の高いカッコいい彼女が……。

これでお互いにうまくバランスがとれて、ジファンとダルレが仲良くお友達であることができれば、1番良かったのだが……。

## 韓国ではイケメン俳優にもコメディが必須……？

韓国を代表する若手イケメン俳優であるクォン・サンウは、一方では『火山高』(01年)、『マルチュク青春通り』(04年)、『美しき野獣』(05年)で、筋肉ムキムキの肉体派としての魅力を発揮しているが、他方では『恋する神父』(04年)やこの『青春漫画』で、コメディ俳優としての魅力も満開……。これは、韓国正統派男優を代表するチョン・ウソンが、『武士(MUSA)』(01年)で圧倒的な男臭さを、『私の頭の中の消しゴム』(04年)で純愛ドラマの主人公を、そして『トンケの蒼い空』(03年)で、アホ面をしたまぬけな野良犬「トンケ」を演じたのと同じ(『シネマルーム9』155頁参照)。

つまり韓国では、いくらイケメンであってもその「売り」だけではダメで、必ずコメディ色もこなさなければならないということ……。そんな韓国映画界の「義務」をクォン・サンウは立派に果たしているが、この映画でのオカッパ頭は正直言ってあまり似合わず、かなりカッコ悪いのでは……。『青春漫画』というタイトルの映画の出来としては、決して悪くないのだろうが……。

## ガラリと変わる雰囲気だが、交通事故の「必然性」は……？

この映画は、前半はまさに「青春漫画」そのものの、たわいもない「幼なじみ物語」(?)だが、後半はガラリと雰囲気が変わってくる。そのためにイ・ハン監督が使った手法が、韓国映画に多い(?)病気や事故。あれほどアクションスターに憧れ、スタントの仕事をこなし、今日はスタントマンとしての大仕事をやり遂げて、充実感いっぱいのジファン。そんなジファンを突然襲った不幸は交通事故。

昔はよく、「清純派女優」が映画でヌードになるについて、「物語上の必然性があれば脱ぎます。しかし必然性がなければイヤです」と言っていたもの……。この「物語上の必然性」という視点からは、ジファンが突然の事故によって右足を失うという設定はあまり必然性がなく、取ってつけたような感が強いもの……。後半を少し深刻な雰囲気にして、ジファンとダルレとのラブストーリーに厚みを加えたいと思うイ・ハン監督の狙いがわかるだけに、交通事故の必然性について

は、もう少しこだわってほしかったと私は思うのだが……。

## 友情はホンモノ。しかし恋心は……？

小学校2年生の時から大学生までずっと一緒にいる中で、育まれてきたジファンとダルレとの間の友情は固い絆で……。もちろんケンカも再三あるが、恋人にも言えないことが言えたり、できないことができたり……。この友情はホンモノ。

しかしそんな仲であっても、大人になればやはりお互いに男と女を意識し、彼氏や彼女と比較してお互いを見ることになるのは当然。この映画では、それが悪い方向に行き過ぎて(?)、お互いのケイタイから番号を消してしまったりしたことも……。しかし、それもこれもジファンが交通事故に遭遇して右足を失い、アクションスターへの道が断たれたことによって、すべてが変わってくることに……。そしてそんな中、2人の恋心の展開は……？

## さて、あなたはどう予測……？

ここから、この映画後半のハイライトへ。いつも明るいダルレは、絶望状態に陥っているジファンに対してビデオレターを手渡すが、それを観ればすぐに立ち直れるほどジファンの身体キズと心のキズは浅いものではなかった。既に恋人(?)のジミンとも別れ、絶望の淵から1人旅立ったジファンは各地をさまよい歩いたが、それは一体何のため……？ そして、何を求めた旅……？ 他方、ダルレはヨンファンとの間で愛をずっと育んでいくの……？ それとも、ジファンが戻ってくるのを待つ……？

韓国は日本に比べると寒い国で、雪の多い国。『冬ソナ』でも雪のシーンが多く、その中での抱擁シーンがオバさまたちの涙を誘ったが、若い男女の恋愛には実に雪がお似合い。ところでこの映画では、ジファンとダルレが雪の中で涙の抱擁をするというシーンが登場するのかどうか、さてあなたはそれをどう予測するだろうか……？

2006(平成18)年6月21日記